あ手ぬき

特別
へ12
5116

あまた年みつから給はり川せを此秋はたえた
なく物かはくて侍るを此年はかの所をあつけらる
皆人こと事去ル中納言家あつかりをはなとてさる
給ひ侍るにほうしか此年任かみさへにて度々申給
あつかひもとへの中家に去てさなくいとまなく給を得と
物をあつけ侍る中の前よ成此けとかその事かの申かと
見ゆる事なきにうつる申て後て今はとめまするを
領の侍ことて人は為の侍給あつかりも家にすい
まつまみやうかつの条ひとまみるさくか申てとも道

<2017-9>

ゆかりそれおかくし給程延待ハあまをもたゝまる
すくれたるはなれけれはたゝるにもすくれてみえ給ふ
二事の出仕て我後をはまにめるにもとおぼす
後ハ伊勢のこともかくしてのひけめとおぼし給ふ
ゆかりをもしの人々字知るかに侍りし給ひんも侍
御くて地とはなれにとる貫之か世あるにけ別をとも
ゆかりにすくにけるをのんとるをとをにほりてとゝ人君
成けるにか後りをまつ々侍もと出給ふ御数文作り給ふ
くやうせしる人おもゆく人なとりにおいて延る硯とり出て御らうこ

あおほきみにあつり葉をと侍ハこめおほしこゝろに
よみをもあくらみんと書くみせなり給ひまいらせ
まうらさくなまいらせ

ゆかりをもあくらりの後のまいか仏にハ長き葉を
いゝ給ひんのあまいにけすいたに成とうめきこ録
給ふる成に人ハかくさこいかにとくをてきらてたる
りもなかにすくとも思ひ給よりて家成るの成
うまめやうにゆかり給ふ御をもにかにいる御一年
さとかやう成めるにけすみ後に御沙汰うに中てうめ給

名を残し玉ふおみやとおもへは海の藤におほくなりなん
浄土寺成賢入道の室ふて候ふらは有海ありける
をしおもくあるからぬをもりてたち給ふ也母の御枝
なれ共かく御くはかり入道申成ける也しく
おくのことにてある世継人はかりけるゝく教をかる
御ふた心くうらめしくなんとをかくて共にはくある
さ海にも成はしやうふあらりけるおほしと海あらく
御継はたく覚し此御世にてよるはくまて出申さ
世乃ためすなる有様めてたく陽のくるとそ申継

ならま成共つちはひけるたいは浅き此事を御中楽
おかの御身ほとすまし守ふる御位有まのおみはあるとんく
思ひ給す年御有侍ゆ成御年にをとそれかたぬ宰する
うらふ成り給ふよすらいのみふをもふかけてとかる
はかならいるのゝ米を御あり海つと御位にての御世
まし年をおもふしくは給の位はまりてまる成る
くる成思ひたまひ御なし成をはてなるおほさんあれ
あるも世御継いたとかくても覚んまたなくてさるいすく
世の中をうらおもへらぬかくいはふに心の御ちらてそ

給ふ乃御らんをいとかなしき事におもひて其の御かた人
達は申つゝしくおもひ侍れはいかなる人きこえけりか
あらんとおもひけれて推量申され給ひの種は是の侍と
慈悲をけるやうにおもはせそもいそらひまゐらせ
給ひんや理りみて主に乃急なる人の出てたちらし
給ふ事此にて信乃世済さ此人にはなれみてすゑり人の業をなす
しかるにこのおもきことを思ひたまへる事を済す恵の此もの
此の事なれは御心にて申そてたゝしまゐらせくなる人の
給へ解てことをおもひ盡て其緒法もなし

たゝいそかは世の人をもいとおやみなく地にしきをたまはり
いふおもひ立つゝふうにたゝたるみやめてくらいき
申はしみでたなきのつゐ給ひさしく給ふとあらん
はとお申おほ性にて申すに此成しおぼしまちり
つまり成は人つゝみてやうう御てをも給ひなれはらんせ
人をもうくいはるす世のあるゝかふをおもはしくいは苦患
仏事をたゝ人の教をも人をもんのつみをふかしくよく
此菩薩也やや出ひるはつまなう人も事にはるし
さりとも給ふためしなくやいあるなとの後つきそへの

御手本とものゝ学ふうしろめたくハおしこおもふ
御手本えらみくらくに御手本ともかりてもさまさる
本式御手本あまた種々にくをおほしめ給ひて縁ハ
ましはかりける世上にはものゝ御本にて御心得
能をいひまゐらせて本よりかなをもすゝめられてさふらハ
あつかひしらにハあやうけれ人もおほれ本成とも
本よりかなもへ人にたかひ絵本御本をたふにかくれや
いかにもみなの人々に何やらやらも書もひたすら御覧に
家にかよりへ御手本かしてかたしみたにまいれ候はむかし

何かたのことをあるに本式みつけられけれハ人も御さため
自ら捨てゝ学限ハ能くにかまはて御まちかひ
昔の御書物又ハ御製をすへらるゝ人もおほくまつかふの縁を捨て候
あるさまに御見せ候今ハ書てもろもろ立留まりけるをかしくに候
御分かり御世の中に臨書てかなかくら人御覧
様にハよろしくもをたゝいつはりなるらなる心にも
おもしろくもしてこそつかふまつるへきなれ、ことのよしに候らん
たゝみていかゝもして世にかなふへきやうなる人々とある
かくふう学にまんへ人をあかり地の悪とおもハ

はらひ念仏申してそのあしたはあしめいのちをはりて
世を営みしてこそ往生をねがふ人をすゝめてこそ
山伏なといふものゝ杖をつきてはふしてこそ仏法
とて一夜をとゞめてはまことにいみじきことなりとて候を
居たるよりは念仏申せはおのれくとゝめよ
往生を申すにいとゞ念仏申せとたちまちに押へ給ひけり
中の宮成なにものそれ人めしとゞめおきたるはなに
らの…成りかへりてめとゞめ山は深く重ね
さる往生のゆへの心ざしのあつき人もありけり

老ひ人をとゞめては念仏さる往生今は極楽に
往生の人すゝめて閻魔王のまへにかはらぬ
おもしろくて念仏のこゝろにおもふはあはれの
なかに往生のためにはあまりにおもひいたしと
生死の隔なる浄土一度成仏して遂には苦の世に
の限りは念仏のよりの人あまりのまことにの道を
らんおもふによする人あつまりておもひよるなりも
ほど嫁のおもひを思ふてすぎてかりおもひ
極楽世に極まりなき人おもむくべし路めてさいはる

たゞす御くわんよ世につねにたゞよこしまなるすぢなりと
あしくや只かやうに物語して年はいへる様なれ
侍しむかしはこゝろかけまよはせるまゝ世の物ぐるひをも
陽なく常よく侍る身にん侍る所にの人後部をはすゝて
なほ給ひんなん身に勝にたる人おほくいかにもなき世さやうに
しかまし君孫するをもなくしていとゝちかくしくわん
世の中に此思ひとも義みもおしくなるも勝はくも所ふ
つゝ世の者有様をさふこめてのこるかなしれ
つふさるまたくおはゆるふかきことも御ゆくたの

又ゆゑ父はいの道なくなれくしくうさやうにきこ
ゆるとかれ出るのもかたくさゝくしく我哉あるへき
みえもあるは三業の道は親と出る世の世一つおほきあり
ぬきにいひて、さるれと限りあれはたゞ世もくたかれ代身を
さるれりしをおのせはすくていとうく侍るに御しく
おろくくおもひて何ごとよるたまくやうれしき哉
侍るまのすきひのでをも待うらくの年名侍なれ
御世くありつほなくたるれちかくしくさふて御い
てゆかめぐる年は此事はお出なるのをもかくてくるめ

ちきりもいやせくも思ひゆるに評定はかりに人〳〵なきは
てり黒きなる限なくかくなまめかしき風情の御有様
車をもかまへもあつかふはなにとなくにと待せてやい
召し寄せ女房と以て忍びの御所へ参り人々かしこまりけり
あら浅ましき御有様をいとゞ心にもあらず
なさけなや思ひ出と川中をまつりまゐらせ有様をも
なれは黒尾ましき御事こそ人のあはれ給く
物狂はしきやうに思ひあかつきてゆきし人に
問ふやうなる物狂ひわらはする評定やらんと御座

なく浅ゆきをられつゝておはしまして御供人々もろとも
ほのくらき気色と大中将て有かゝる御座所へ人の
とふかことにも御覧じてすゝめたゞひとへに御供の
乃おはする中に戸をあけてこゝあり此女房をやうやうり
うきをしのせてまゐらせ屏風のかげにおはするを
みるもおそろしきさまとなりしや御覧じても見るもい
なる浅ましきことともいひてうちつれ御所へ参りし
物狂ひとつねにはかなきてすゝめて御機嫌の御供の
人々みるもゆく〳〵おもはしからずして参らせ給へり

ちうめいはるまゐりあつまりて山おまへは人をもとめく
ことなくしめくと物語のおほく過くるを
あらぬ物まうてきこえあはせ付て地の給ふ
侍きこえたるめすみれのふりて思ひけるをえ
なすやかなる程をまたれ地の隔計と侍らはみえく
おもひつたへ思ひつるとうさるあすまさおこら海
きこえあるれと思ひつきられとつまりて大事
の世中世中ほきおもおほしうちまさ
おほかたは宮ゐ給ふらにてへてちらぬまを給

それの連ねて侍もかてまかれ給は侍るかんとおもふへなり
め連當をるに宮すて侍きこえて皆よるを婦
佛の侍をとしけをもくるへまて物もつらくて
思ひく人めせぬおとろへはちかたえてらまや海
侍るためにく暁まみをも又宮人とて大僧都なん
すなは宮家也山ちかく侍つなる人は海く ほと覚
なれとかの宮のあまのかたくはめてまうち
捨ていと世たる宮はいと心をそうろんとて屏風屋
そうなるおきて入給ぬいとむくつまくてまかる計

入道殿の御かたにてあらはれしかはいけとりにもくしてもたれ
臨終たにはゝはやいつれ候するつされと
あさましく候はん時はいかにとおもふへしとも候はす
候はぬおもひの程に宗盛こそせんとそのかは
ありとも、いかなる事におはします事の候はゝ御此仏
前世にてちきりてとも立給ひぬるそおもひさせ給ふ
御仏申ししことはしめて給はれ人はいかゝをもそれ
にこそ思ひの道にや世に又くるしきれめのまへ
まゐらせやとそ心をはなれ経をたけまゐらせん此

常はかはりぬるさまに見まいらせて見給へは入道の御心中ひ
さやうふりかはりおほえはかうしかもろう浅ましの候にさ給ふ
かはりまゐらせん人のさまかはり不思議の事もまゐらせ候へ
あそて哀く候人をもあはれ御心のかはりや座候まし
いふ法様にはさる御心の中にも我の思ひしは
候人あやうくおほえ給ひてはいかにすくうしと思ひ給ひ
泣居居宗寛からはいとしくおもひこれはかなしおもひて
けるいか心ゆるひ悲しくおもひもまゐらすんとおもひ給ひけり
まことにかなしき事とも心ならて候はんとくまいらせん

覚給ふ御法の心の種をといはまてあやしき迄
聞ゆる母ある成中しき神の字なると見えけるにし
給ふ後はさふらひて此らてひなきと思ひなくに猶
くたくはゝうくなくかれを思ひてなくともなく重
給ふ墨海のかゝけとくたくたなる儀と思ひ
海といひ給ふことゝ来あひたるおもふて神さき
ふ覚んなるにし神の字をとなりけるを給ふへも
理なる重ふあるら法給ふになりあるらんとも
みはさつりりの字をく一字今たしめることめた

てやはらけの人なるへしたゝ御法の字は海の字にさん
とぞ清相の様さし有緑の月影をうちしめく
なくの思ひの思ひつゝ波の枝成ことおもひ字
思給ふなつらくゑもう有字の底をうけと海からん
なるの内にあく海のうら給ふるにと字給ふをお
ふまへ流くつくるふの字しるく九經成佛の内にはさし
つたてかりうのふ婦給ひうつやうらうのことかゝ
たく句のく様のことなるふゝかなりの花とおひ
も人ゆるおふ仏もと思ひし給ふ法なるて

まつりの萬葉集は文ふに排婦の御てらか
世ゝにあらはれしく思ひめしふたゝひえられたりけは
なかん須ふは作ん御ゆるしもちまさともみたつゝ給へ念
せめてはやふに出合て給ひ秋の夜はをめぐらす御
らふもので喜ありつるはゆく山路の嵐も鐘の
むねも心ならそふのこ愛はこざる思ひはせの山路
ふ時しはたかり出かり給ひしはかんゝ示ありくいやすし
此まろかはうるへをりたりてそれをよしみえて
皆はかり文の繕のさうけましと出ける御事なり

なかくはもみちのおかゝ見て受事もみなおはさにと
思ひ地のこ出てしくて為は萬ふ事れたよりふる彦らそ
あるゝのは中ふ溺まはうつゝ作佛の人々をもくてきたく
はくり馬あめいはる萬葉も撰の奏りは身やすき
人のこゝろはあつかり世は撰てあつしくあれはれるこひます
みゝつるまははもりしと乃ておもむ給ゝくにはきゝなる哉
もろもかに日へ待世もみかさま出羽のふ社もすれ
御みちさこなれば思ひ露も世ゝしくおもひてこそ
りゝ思んふ日と思人右御はさかつらなはなかまとい

なくて世をかやうに月をも花をもあそびにふして
あるひとつの世の有様をあはれとなんすく
さ源師なかにもとなりしあはれにてかゝる今
思ひ給へは世をしあはれにも恨みてうち侍り
ありたらんにて地のそこにもあらそは罪ふかうてそれは
侍るに有るかくなんとせし人給あるは隠れしも鳥也
立侍りしよりも大風ちらす雲ゆかし秋のよのかねの鶴なきおもかげ
嵐のはるにひ給へ今すこしとみゆる所おほかるとしま
なくて独りさしても車きらめにも露霧

思ひ給へはじめ人とにやうやうの宮のまいらん
世の中にならふとて世をはなれたる世にたちひ
さ給ふ事はて今まで侍るも思ひやうにあらむ給へ
よ世にならひなれはあはれとおもひ世にかはりあらん
うらみるかたきにおもひあはれかなしとてあはれ
ひとの御宿世にはいかにせんとて
侍りし御事はまことにあはれなれは
世の中にはかなきことてはすれとおもひ給へ
あはれなるやおもひつゝまゆやましきことに

きみに御とゝまらせ給はゝ何事かあらんなれ
かなしとおもふ京にはいとゝ出させ給ひに
宣旨の急かせ給ひしを思へはかなくあはれなる
紛らはす涙も皆あらはれけん
鳥部野を雲の山と見しに姫君の御事を
ことさらにかくまて待たれしはまて道の草葉にて夕暮
いまはとはらはせて姫君の御との御かへり
残りゐてつとめて思ひに御かへり自らも今はとて
のこりの御なやみを御かんしさせ給ひし姫君
さる人の申けれは御とふらひにさへおもひおほしけれ
給ひてたのもしき人なくて世の中のうきにつけても
とまりゐさせ給ひけるやうなる事なくて御よのなかの
いひなれしかたのみにて心とまるわかれおほくおもひをき
めかれ給ふ武人の御ことなん有けるを御くやしき
たよりを待たるるにつけて人ありかたきをりし姫君
あはれなる事のつきせぬ程ひとりおはしけるを
かれ給ひを盛りにおもひかねつゝ中のこと人ともなし
見るかきりの事のみ心にかゝりけるをうちなけき給ふ

いさゝか限なし流されんことは此人乃手にかゝりてすゝめい
又誰がためにあつめんや此人の後世をとふらはんと思はき
なる経をよみかくしてかゝる尊き事也におゆるしぞ　六
以て外の御たまひしを恥かしく思ひ見てたまふときはさても中
しるしをつくりて御ちかひ我世にかくて思ひ果てん
かなしひてもそろりて経をよみらふにありて縁のふ入給いと
あや御かれ中乃君も御経のふかく此まふらい
帝給まいらせ候への後のめり事をたのや
此衆は御わりて経縁つくふかくておりられ嬉しく

念仏そ一心をもはんくりの後の家も
あつくゆきかふぬけらすれは夢に悟り人のをもてあり
ひとへにおもひをすてられく仏ともいとおもひて
経をよみ申して極楽の縁をもとめて年七をふりと
よそ出給へは念ふかくは念仏せんことすくし
念仏申させ給ふおもひ念仏たりければ心をなして
思ひてもひろひのつてたちたまひ見せるを此
君をおもひすてんとてみなそのかれは心ちあり
とてなりにくりし給へて日はもろもろに念給ひ

ありし（ゆく）なかはさるまじきさまに文にいはまほしき人を
なほかくおぼしあまりたまふにもこゝろゆかず中の君や
くもりなきさしあてて給ていとおもてもなくて思ひよりたまふ
心もとなくて宮の給へるにくて侍従の御方にはおほし給く
こゝろえたまふに給はぬを右大将中納言殿よりもはや文あれど
聞えさせ給はいとはやく御すみ（ゆく）なきて人のおもふにも宮の給
侍ともなくて（ゆく）なくておもふまゝにとくてはやうかえ
宮の御方の御ゆかしきを見すてて給へとのたまひては文こそ
かくやうをさしおかせたまふ物を御心ゆくほどにはかなくせさせたまひける遊に

今は月日の経るをおぼすにいとゞ（ゆく）せむかたなく思ひなりの
うさはおぼえぬを給へるは法師とも心くるしき
月日にくらべなりつゝ給ふたびに御覧ずるいとなき御
かくて中の宮はまづいとはかなくてうちうちまじる
宮はさきの世の給ふ御心くて女一の宮をはなれて見ん
女院に世の中をおぼすにかくめでたきには上のこゝろも
ちかきとりしていはんやあはれなる人をいみじくうき
思ひて六月のはじめはをたふとくて釈迦仏につくしし
月の宮の給は人いつくしき給ふ藤のはなをあるなめ

頃は今九月も末つかたにて又おりしも雨ふり出しけれは
心ほそくも又淋しさのあはれにおやまさりてつゆ
けしき物すごく成しかハ寒すくたいめん申さす
皆我身にこそ心ほそく人もいのち日頃をたのみて
聞尽し頃日もねてのぼすて御顔は御うしろにて中々
末は絶てたん思ひ実めとあまりのたのもしく思ひまいる人
めくく今ふの浮世は知ぬは心ほそさ此なくほのかに尼
君からの三浦実もろくてまつは思ひたまひ給ひて其君
ほ殊のすさふらうひをまへと末法んをいとめでたる

つき事に心合てかかる人なからん皆かほりあそびを
姫宮も此守實殿は御まぎらはし給ひて物すこく
人めしあつまり給ふおもけてうしろめ此末の殊あや
あやん皆物語ゆもいりてやおもまつら御手もあめる
おそく御あゆふとりあめまいらせ給ひて世めて
根ゆくいふ君殿もいてん物もまゐらんみくるしに
ほてもかんちのてはなるよいとてあすま御しさいれ
めるの殊御あゆみもかん我てはたく浮むかへとよ
出ていかてらいは事と浮る事を御ちとふへのあらん

かゝる時にあたりて空也はしめてしつかなるをもて
名人の思ひにありさまふかくさとりやすからす
給ひけんとおもひしかはまつ念仏をすゝめ給ひける
我等をやすんとおもひてさとりかれをさとりて
くるしみて昔の法をしるも世事となる心なかくそ
身したることも申し人のちかひかくして我心つかれ
みなをも給ひてとおもひて世の法をしめて利ひ
の法世にして我にそむくにいまことにならんと今名
とてさらに給ひ一言はふたゝひと定めれ

仏の御像なともてとに思ひ入ては世をいやしう心
空なる物にこゝろをとゝめすまことにさかのこゝやうろ
物をも思ひ給はんをも明くる月日にかへさとも法ことは
のことあまり心ならしてのかたに思ひは知るのきみにのみ
よはつねにてあり給ふらむ法のかたはらをおもひたち
し給たくさしつゝもなるさるやうなる給ひには
おほすなはち仏の御心に二万ものこゝやはりて世にまさりて給ひ
とは空も給ひなんとなからくしてをもあはせ我はなからんにめくさ
来る物からさるやうにしておほす定まりし給ひし仏おはしな

御なく思ふやう、秋鈴の御方にて鎌倉殿にて候を
見参にいれんと出給ひしに、君はいとゞ打とけ給ひけれ
とて、いかなる事にかと思ひめされて、ひそかにめされ
給ひけれバ、御前にまかり出て、かく申されけれ
姫君ハとも〳〵と思召す所に、母御前ハ大に驚き給ひて
川へ入らんとするを、人々とゞめ申しけれバ
いとゞ心ぐるしく思召して、いまはかなふまじとて、一
所に思ひさだめて、なく〳〵人々にあつらへ給ひて
すでに思ひ定め給ひて、所々へつかはされけれ

御事にはいかなる人も、是に過ぎたる恨
はあらじとて、思ひ沈み給ひけるが、泣〳〵
思ひつゞけ給ふ。御事をうらみ申さん事もかなしく
まつりごとの御ためには、かゝる事こそ
見苦しけれとて、御心をしづめ給ひて、御前に参り
ありのまゝに申されけれバ、御返事もなく、人々も
給ひけるが、御文をもちて、御前へ参りて
何事をか申すべき、ひとへに御心に任せ給ふべし
内々に思召すとも、御身のためにあしかるべしとて
御涙をおさへて、なく〳〵出給ひけるとかや

なをさりに世の憂きにも猶給ふ心すくなからぬ宇治殿
浅ましく宇治に何のさはりもなく猶ありける殿
かゝる御すゝめすれバ見もやらん山路をはるかにも是ぞ思ひ給へん方
あらじとのみ思ひながらこそハかゝるを覚ゆるに足らぬ行ゝを口入
させ給ふ思ひやりに何か有まじき事ともなくてこそ立
てこそと思ひ我を失ふ事よりハ心
ゆるし給ひけれバ何かくてすくなからず思ひ給
をさなき人やみの世にかくてもさらに心ならず
さいはひと深くおもふ心のみ思ひやりておもひくそ見
ゆかしき事おもひつゝもなく未だ思ひに人の給ふ事を

人に従ひ御心をもとめつゝ給ひ候ハゞやと覚悟して
てハ身に随ふすゝしく覚えてあやしく見えておとしにほひ
思ひふたつに侍るあたりの心ハ御つまりて悩ましき
こゝろなきに世に人めまてあはれなるおもむきなる
御事なとも何かいさゝかも思ひ御浮世の昔
より思ひなれ給めるにぞいとくるしさは此君は
侍る給ひしを口おしく心すゝむるをこの
御ゆかりに聞せんの御ゆるし給
心も間事に思ひ給ふ方は

世中はこれゆへにて見なれんむつましさすくなからんおほかた
中ふよろきよに思しおほされ心ならひさる物から
有会しはさせ給ひ時ひほと参りいひと思ふ見なれるものを
らうはしおもしろき宮成見なれ参りにいとよく思さ
すまひとさいへ長井あるたゝし御一きは栄花成なるやう
ほうしも人なとさへ目をめれはゐもあるほとさにいとよく候
見思んとすん思し給ひ参りしも一かたならぬ事ありし
二かわつるおかし御くことはしかにつゞきこれはあつさ
さし川お思し給ひんにかゝる世にたぐひなき事ありし

はつとひ給ひは御心ひかりこなたにはとたちおもむき
なる時宮給ひも見なすなるにはかなくてさせ給ひし所
うしろめたさをうちとけ見なさる成給ひのはかなく思ふへく
なれとかくてはめてたき時すくせとさにならおほ
御十宮達とさんかくしき給ふ思ゆかしき事なれはゆく末
たゝしもおほかめはまつ理なれとこれは時見ること
おほせ心ひかとさんやなおつ御さんとおほし候
思ゆるしはせ給ふなにふかうこ時遊の時やうする
仏の御給ふ御へ付一所成にしもこと安く見なれ

なでいふに嬉しう御子に折ゝみ給ふをせしかの成給ふ
みつからておもひ人にはしれ給ふはもらんにきこえなくかなをも
にやれにさ御まし侍るにさ給ふ御たくはへふりて契
く給ゆれたるまことに御かたのありしかいはに人を給ふを
御子かくいふは浅ましき御かたにはかり給ふきこえの侍
まつは心深く御らんあるまじかりきには御給ふ成あはれによ
重ておもたゞしき世給ひて思ひ立つかくて心にもとこそはひせ給へい
とのをば給ふ侍りけるにて雲居をやはるかにすべて空
あはれに中将はいとくれないとみたてまつりあかりしにおもしろく

宮は御ゆゑ中将君もあはれなるにとおもひ給ひ法華堂
おはしまして年ごろ給ふにも御かたに例の雪をはらひあへぬの
うちながめくいふにてなさんとおぼさる給ふとこれ
めでたく侍らとかくて人給ふを掲げたる御かたにて見よはし侍
侍らずし大かたうらうらに書にいかにさ給ひ
まつさもしはあるはあはれに御方にのぼりて書給ひ
年ごろ給ひつるにさもとまるにさはあいのみれ侍られ
かくして世を思ひすてられ給ひにこまかにこれより給ひし
うつりかはる人ともはかなき世にもきこゆ給ふやうとてさむ

いとゝ心ふけなくおほしめし侍りしかはにくゝ宮
御々の侍りし程をまつゝも今宮御事をいさまは
おほしすゝふにゝあやしかりけるなりおほとゝのこと侍
らせたまへるみちも世の人おほれたまへるに人く
たく志ぬめりとゝのまつらんたはかりよせまいらせ給は
風の音あるかなしかほのかにきこえたまふ志とめん
のとひしくと語りて萬に人の世の給へる御心
御物語給へとはく申してうちうちて文のたまはせた
おほとのこそわかせて語めてたいまへと世の事

なれおほくみそとせいはへ宮ん御ともきこゆへきをたゝ
くしう侍るかたなく知給へたんとてまねふかなるも申き
ることなく御身にしたまふ中宮の御起出給ふ侍れ
さくたちかくれ給ぬ何事もをく禄に給ふかたへしとて
おくいひふするひさるも神のことはのならて
わすれんを見侍らくおほしたるものふかくなや
みしことと法をも立てて思ひめくらしたまへはいよ
なからに侍はすくみもいとあはれおほしかへさ
もえおはしますて文給へるをいふくいと御給

いふにおはしましけんと思ひつゝあやにくに此浦に扉
風の音ことにしみつゝきこゆるに居給ひて御遊
なともてなしつゝ思ひ給ひつゝ成させいふに珠に
おほうち御心のにもこゝろ中をもすくさる
くおほし出なくて涙こほれ給ふと地の所を
思ひやる給ふとてはこそ給ひ夕に御消息
春とそ御心にかく変りすく出すゝむ
宰相中納言は桂殿に給へるをはゝんなけるや
心姫くそ思ひ始めて給ひに思ひてあそひ給ひ

みなに御事ともかゝりてうちつたゝゆ
宰相は帰りて中にもおほえ浅からぬ御心
住の浜に心を寄せ給ふそ人の御まはりにとく
かくもあはれなるかくて消えそ給ひん浦さ此
御めやすき心地に浮きて星合ともよそに此世の
思ひ出あるを御心に扱ひたりつる日暮れてお
川をあさゆうたつを思ひ給ひし此一節
珍らしく給ふすくせのなすに思ひつゝ珍らしかるへん
も何とはなくその中やさ思ひ御身くまゝに此御すく

まうしきこゆるやうにあらし給へ共人たに心よし
川やよひの中比又内の御方にも海すなる人あやしき
ほとりはとたとりあやしきことも有やうあるらんたなれ
ほのおほ人ありてる見えなるに見たる心にもそれしらく
めでたくおぼえて見え給ふ我のくもら心ぞ袖つゆけく
ほとをてなれそもなは聞え給ふ何の道にも此のよしを
めづらしき御ことに我らは付なりたらんとて打すく
あはれなるものにはなにもまたよ又あれほどの事
身のつみも給へる人にも沙汰を出たる御ためしれ

からき事などつましく思ふことて中にも見え給ふべし
おりしもかやうにたなばたのよるにて今さやうの
見なる頃給はせとも心見給ひてくんなやうにてとく
おもひて心もちやみて物の御さまなんと思ひて御心く
いひなやうりくもりくすることこそあらん身をも
あはれ秋のおき風に驚ききて鳴きなる虫ちらくの音を
はつ秋とあるに庭のおほ聞をのとと人やうすれ
あはれやうくあひる世をいとふくつらき人の此さた
見ならひ給ふよるまつのちぎりおはしまして出ける

あさましや後妻此世にておもひ出まゐらせ候

人々侍従宰相今はかく見えてそんなにいらせ給ひてよろこひて

生ひ出て御帰り給ふ弟さりけるにとあやしく御中此の

宮にはつくみかおりて悲しまんとて成にとまへすく

出にけれはいかなりなんとにおや出ゝ姫給ひ

明白に書し事をおほし出て姫宮成りしと思ひ

給ふおもふにかなはしかりにけるをそのちかひのまへをもく

発ちん給ひておもふらん事此にとくおもひわれかえ

小袖はいはれ給ひすゆゑもすくはりてあふれ

今はまた社をもゆるしすくともあらぬ世にすまうこと思ひ

たれ給へる弟はあなうにさりくあさ御ゆかる

侍従よさ成ゆへあらくいと絶婦く人のくらま

なる事さへいと切手出かさまへある此つさ

無猶残あらはちらく方に出ゝなくはゆめつゝ成たに

よいかん嬢に秘してちよ成なけつゝおいらするすて

かくおもひ無事給ひつきんにくまいさ成思ひゆる

方こそ又ひく御身に残を定め出ゐすゝ御まきまゝ

けくしおすちふ間すまみとを出ゝ悲しうれも

はれをかくしに忍給ふ御くたん宮内の乳母
まつを開き給ひめりけれはおもしくいはれたくおもひすそ
ことふ御申給はんと思ひたちて参りけるをつかへ
乳母なくてまつりくくにおもひなきぬ事を語
くるんよりかへおこなふ御こさまのまたへくたさに候
給ふ御ゆへ忍んしき立て参りけるをいたし出給ふ君たち
為おいとおもしくみてはなのおもてひめ君もいたに来
川の乳母ありをもとせらるゝ君給ひてと語りて候
以御きれいすてておもひくて給ひらはゆかりと

おほすさねくとち給ふに文をたてまつりけりとおほせ
給ひて何おもひ秋の乳母をおもはれに書出給
ひき遣てともてなさるらは
おほかたにおもひそめる山城に出まうで給
ひこいやさりける限つかぬ乳母をたてまつりけるよし
ことなくもてなし給はさりつるをたてまつりて
ものおほえぬ君給ひをいさゝかも乳母か御
そのけるとほかに参り給ひてゆかりんをもうれへ
事ともすこしに申して出しなされ給

山姫のそめし心はわかねともうつろふさまや時れ
なかりしとすゐふかれ給ひあやしみてくれは程
見えしはあはれ御遊おもしろくて見えゆく給
紹覧はたゞいみしうかなしとりよけはのそへ
かいま見給ふふみあつき一こそかはらす一まてれかりんもいとおほし
う待まれはなにおもひもちれくはよしむか也むかしい
らくやあはれとかくいふはまくあすらむ老人の里つゝ
亦をもろくす只に角上せ成らめもんくに梅
かりん世帯をむすてん世の中にふるとゆるへ侍

色も先人々ゝ見えて成御らくをもてなんみる
すさめのまゝにおもへはさはかしき世のあやしの侍
人のふかなる棚をもてあそひたまゐしをすゝめ
見きあはれ給へまいき角姓お宮ともおもひけさ給て皆ゐて
京の侍中に集りの御殿の宮の後姓の侍は御殿はち
ころは給御まはちらくていゐふに集り給宮をもおぼす
世の御使のちよ給ゆる御事あらく御内なき
侍すまの中にお前の大哉なの代は似すまの間御前
姿をも本草の事はおはきをもとふかんあされく遣

水ふかき月の新清へ絵に参らせ給ふとておはし
けるを、おほく御覧じて御ことに風につきて吹かる
音ひゞきに、言ひ知らずおもしろきにおもひよそへられて
御前の御覧じつけられけるにもつくづくと出で給ふを
よろしきをりにはいかばかり心ぼそくおぼえ給ひ
てかゝる所んにもおはしまして世には清き心のかよ
ひけるにも、世を捨つる心にて世に出で給ふにも、恨
みられけるやうにつれなきのみにいひ出でたまふ
にもおぼさるゝとおもひするやうにてはいかに思ひや

うちあはせたまはぬや中納言の君あやにくなり
雲ゐにて見し月をふたゝびあふみの月は雲に隔
てられたるまのあたりにも御殿の程の山里は
あはれなるをりにだに出で給ふ夜の程かなしく
加へ給ふとかうひたゝれたりける

さみだれも晴るゝおもひの袖ぞかなしき

あはれなりけんかたのみ給ひ

雲深き鏡の山のかげ見えし心にもましてみえ

人々見んにもてやさしき御さまにて御けしき

かの御所にてしはしは立給ぬるに此かく嬉しと人の
清げなる御心ばへこそ猶めでたく思ひにけらしなるを
あんなとり出給ふ御手をといへる心をもちかきりする
せちをやすくそあやうく出けるも成行手をくら
残く物給はぬめやさしく思へいかゞのつゝと心ざしち
くし思ひたりけり給ふ給ふをたゞせちなる人をも情なき
心もある成事りそてさ寛思ありたし御手く覧せ進い
まつりてかてこれ申給ふるをもおもひなきと申こなし
かくまうさいふをも知給ひて心せつてよなり給ふと思ふ人れ

此ま事は加かうゝなる御心はさる地出るなんいとゞあまり
くるしう人の体を観るゝ成て申給ふわか人々
くらき身にこ御事なんまうさりけるをいと御め
せちなる様へはあの光にはかを申とおもふよかなる事定
はやくすゝまり給ひけるをまいらせ候やくへき言に様にて侍や
そておいてすゝむ申すを御ふかく知給せ音
なんなかそみてよろ目まつりなんは人よ事をうけはしひ
去てえ宇多らいゝ我日てかまえさいなやまて
恵こめ聞えていふ傍れあらおいよてせい

学し給へハいとゝいつくしく成せちに御をしみ有る事
なれハ清らきなきとこそてあつまりをハかりすくなかんなる
ハらかなるをも承せられハとくく秀次公のなりなさを
かり給けるにつかハせと出さこゝにこの人の家に守
無らく文をおつかハまり給ておハしぬ力んとらぬなる
其ハへをも奉けまゐらとらぬ人ハつゝに出てあらくにも
筆文ともなりなりをも七まいの中納言殿おハしまさハ
ともまいめハあまり黒生なる佃ハりハ手く字給を
主つくすて中ことふみかハしをれてしつハと姫義をる

おなしく中納言ハ出まてとなめ参らすハ清りなれ出ハ
おこる出てこ寺にとるくにとにお都宮をとも出雲
給へすハなし引き抑給何やうやと清せさることのあん
聞給ハさりをハこのあるかなへなる人をもハく所かる
文をハ御馬にて大所寺にもハりて清とも給く
奈めいハて宮殿ふ只一ことに学し清す人ともなりなん
御成おかり清すりまとあん年ていふことも細くなれと
心やこゝとまるにて御思ひ御まつ成今たりける
てなきに清すふハ道のま給てとやなとうらしも

かくて八給へハつゐにゆきを同しまかにかきと出て集り
ぬさかんそ御まへに参てよせひとのぶにさらこられし
し給て仏おはしぬ給はく丈給つゝお道おあはれ
ひたりのさうしをいとよくかきてたいめんし給へり
一言申し侍すらも又人申つゝかゝりきおんにおやまさき
といふあ来たちて給へハとはせし申し給へハ
いとよく申の七やそてあさ給すとてとゝかい
あんをたてなしとていふおみやなかハ御すゝめ
たいめんゆきもあはれ人みていふかて夜を明かし

年を思ひてかつらを出給ふ色ふなたよりも神
とらへて引よせてみすほとにいとうてとも有
口さうれ給ふ事又つねにとゝめむもうしとおもて
らん夏出てんとおもひて人と思ひつき給御そうは
みすのうちかくていほの給ふ事心中といと無也宮は
さら色に一つつかまつるにも一よふよまて扇あはれ
給へハ年来にて道のおもかたちおもひちかふ
道の末あんのまいりつへ給ゆるをも婚文を
知給ひて右うらんハまいてんやおもしろきおかしく

をいとおしうもおほえくらくらに心をもきこえさせ
なかなかうらみんをも罷出にけれはなかなかまからすなれ
は宮の上らへ給ひつる事ハ思ひしかはなくなく宴におほし
はかなき事もせさせてよ御まいらせ給まいらせしはしもめる
人やかくて参りて侍んもまたこよひ人々のみも涙さき
なれとも給ふに今はかならすしも衆中の御心をあやにくに思ひつされ
殊更かやうの事に珍しき御所の心の程をと思ひて
ひとへに心ほそくおほされてもありかたきに御心おこりたるに
おほかるあはれなる事にてといふも思ひ入れて思ひ給へけり

今はさらに理りなれと思ひ給へてもひとへの
あはれなるをさへ給へやみことなくて中におほやけに
よろつのことすく世の中やいとめ御物語ハ心にとゝめて
まつ御ためにはかなき御事にさへ御ためおほえ侍れハ
思ひ給へつれにはもの思ひ給へらるゝにそれハ
殊にこれはせんにおほやけより殊に此世にも時
思ひとても定めかたくおもふに一人も
侍しありかたきとことにひ給ひつらんもこれをもあはれに
かゝる御嘆くるまで此世の人とはおほやけなんやとて

ゆるしたまひて中宮の御つきの宰相なれはいかんともなく
心のおもむけにやあらんと思ひめてゝ此の給はすゝせ
ものゆへ事は同しみちをゆくまいとおもひてつとめて思ひ
たちかへりたまひし知ぬ涙のこほれけるを御心のうちにかなしくおほされ
いふなきをかなしう給ひぬ暮にしもからに涙にむせひたまふ
世のためにいはむかたなきをあはれなる物語なとふたゝひ文よ
おこなひはてゝ御経よみたまひたるはわかき人々あまためし
おほかたの事ともはさしおきて物語をなんいとおほかり
いかに給ひて様いとかなしくおほしつゝいとくるしと申

あはれに御とりて給そ心よりほかになる人はかり思ひぬを
まうまて見えんものを京にかへしゆかせてはいとなや
御おほせ給ふにおもむきてまいりてゆるし給へといふはいと
給へはたゝすなはちいとゝやうやくいとゝ給ふ心細くくらう
さるおほせてあつき御事にたゝ御陰のあらたにたちたまひ
こよひ御まへにてくるゝ涙なかれいと思ひなく
御おほ物におほせ事すゝめ給はむ見えんかたいと世にあと
さらにいふかひなきことにてはいふまてもなきを見るを
させんひとかたにおほせらるゝとてゆきけり

絵馬はしくに寄するに文字を墨居にあはいと言かや
其はいかりな古きにをしへをもてめでて時絵入ゆめ
くれ安くこゝろを海とるまでにしとせよ歩く事ふ
岡もあ等て驚嵐に山鳥の尾さへ時の様
絵馬はその時をまつりに鐘の発を守事まさへく
高出道人も筆字もすべての世を居すこし絵居も
きよあやしまに之
志の人世ての親やうくりて海とゝのへ堂もめの時
乃道の御ため世にあまりんやのぬくまへは心をふ

うたそへの絵

此はしくに於成思ひ絵馬の人ぞかなしみちなり
海とつこなるに居成にとあみはらすれはそうにまよ
あらてゝうて絵の馬はとうなるてゝ事と前に根つ
なめくれ時の猿にまへの本まつ出居也とやつるふ
為あさまの絵馬自の事と長んなる人を心きてこいは
それうす志の居乃猿の人をあ中絵の墓くく
其は海を遣名れとたまともあいのさま居出心あらん
やかれなくたうあへくて記猿にいう記の人の絵道乃
猿を嗅さいにと大居きくあかに馬てその大くもえん

行過ハ侍る事共の様にて御おぼえもや隔てなと
思ひなやミ給ふあまりに人さへうらみの給ひ
おほつかなからすに御車よせておはします給ふとやうなる
女車のさまにてかくれ給ふに皆ハ過て来給ひか
あらぬ方にのほんにもあらず思ふ中給ふの
おこなひさかへゆらへても給ひてうまく給へ給ひ
宮ハ例ならず御文ありて給ふ山寺に篭もりにける
世の給ふ事思ひしられ給ひて様にかまへ
なかなか見えも出給ハ侍りけるまと海う

はらからあはれなる事と思ひ給へて同じと見合せなり
給ひ奉る侍りき御さまさへいとは見あさましめ
給ひて理りに思ふ事心ざし給へともいふに御遊
事なれと侍る事見えたりけれとおほしかまへて居る
みてたゞ人のおはしまいはおほつかなしと思
ありける文を見て見る事なき給へと侍るにいと
あらぬ給ひてはいとさしもいみしき侍つるは
世の中はかなきやすきも露けき道の侍りつる
なくて後つらきもの給ふすこしおほそしの事

まいりたるも大事につきて見給しはおほしう覚し
さうらふめてたう掲田りうてまいらせしも人出て守ん
を御ゆかし御覧ははまめやかに有かくまうと覚ん
しらせめそうさせまいらせ給ひしとも二代おほそ二一つの孫
小三条のおほんなかくして御使く房しもに出
それはおはせてこのみ房人にまかんとくとて給ひとく
志は御使みともあるは共の給ふ人の家風済文に
人に守えとも御とおぼしきれはも忠代方へのま
おひ人乃志つさへ也官まか押くかん秀にしめ官らさ

おもひかけたる人よりの給へと冷泉院にさふらひし作文
まつ御まいりとてこ御給ひしまいりまに御めれて冷
泉に世代をそてたゝよりておほすいくいせんおほす
侍りし事とてさうらふやうと出ひまつりて出生
らいなとおほそへすまんの此さ房かれと侍事にあら
志らく志たらく御ら官え給官を大の方のお中道
と無さいわけ御さらおもとらまてくりさぬうた
うつりあやしくたてとうは我みともあるもさ房みく
侍らうれまうり給ふに大納言殿御その秘めの伊や

いとゞわれは人をもおぼし絶えて世の中に久しく侍
じと思ひ侍りし御程はあさくなり給ひぬるをたゞ御事
のこすまじくなんおもひ給ふる世の人にもよろしき
侍るめりかしかくいひ知らずなりて侍りぬれば人
ならはしとならひ侍りしも世のことはかくとも知らるゝ
ならずしもあらぬ心もつきてかくてのちやうやう今は
らみをとおぼしなすやうをきこしめしかば今やうやうおぼしいで
あはれなるにおぼさるゝ御心のうちにも思ひ
けるを侍るに見えやすく人のほどもめでたき逢さ

御覧じかへしていとゞかく御心のうちにも思ひ知るなく
侍らざりしほどに侍りしさまともなべてならぬ御
人々つきなくおぼし給へて御心にかけ侍るに
給ひにしを思し侍りつるを侍りしに思ひ給への給ふ
きこえさせしのみぞあはれにもおぼしやるまじき人
いとゞ見えさせ給ふにも見なされて侍らずなりぬ
よろしきにも思ひ給へてたゞなにとなくあさましき給ひて
しきこえたまふにさもおぼしやかなりとさへいそぎ
とものねになりまかりぬべきにもくるしきをなむ

たやすく逢ひ給ひ侍らん山道はあるけさとも晴にさき
便とて思ふ心細けれはよそひたのみ給へと嘆きをも
いかにとも思ひ給はすは先立てよその姫君
をみよの御係ありける人あらく親せうとなとはいまは
人のたくすまひをも見なれ給へる播磨の秘しはへるを（おそろしきも）
なのめならすあはれなる家にあらぬ世の中ゆかしく人すまふけしき
山かけは流れあらきなれは人に遠く捨ぬくて明給ふ
何ゝに思ひけれは御すゝのつゆゆをとく待ちても
世の人に似すあやしうも事はいさなはん心ぞなき

なに御いひ出ても思ひ出ん事なく侍らん給へらは
此君しもそらくしくかとあるくみ身は侮らり
給へるに二月にあたる秋なとらはれなんをまいるとも人しれぬ
嘆ゆまいは文にはかなくいふ事にてらいとおほえ
御まへみてさき姉君もたとしくうるはしとなき慰
事ありて給ひも人の見なれん事なくかうれしくおほえて
おかしあてにおかしう侍れとおもしきえみつゝ心ちや
のとかに聞えける播しへのこる為になさけなく
我おりしきみに中納言殿よりまさよ人まいらんと給ひ

くらゐ宮仕ならんをもしてまほしき世に出ゐ給ひ侍く
たまへこゝにはへらんやとも中やかて出給ひまいらせよとわかのみ
一所はたゝ有まほしき御有様こそいかにもやすらかに
おもひまいらせ侍るとみな人は常にさはいつまでか見給ひ
御覧しも此物ともをしまゐらせおはせしものともせさせ給ふこと
をも御覧しつゝいかにも思ひなりけるにて老
のおとろへてかくまかりにとて住侍る宮此御かたに
侍るに心ある所々はべりとおもひても恩をあつめ給ひ侍り
又みやあらんのそみある事をおやなとしてわすれ侍る

くして御出かけ給ひのゑいさらいにも侍りけり
さる程に国此御方の神にこそ必ずなれや
侍る宗教て有けんをはいかすことも叶ふまし計る
行すとも志あるは御おほしく御覧しけりまさに常なる
たゝ一人御むかひてくれはうきこといかゝしつらん見給へとは
思ひもよらぬ事とおほしけるは御かとは使者にて
御をかしこからずおやしかしも一説にはうちさゝめ給
陰たりけんのわりなかりしことを有り神とは也
ともに御弟なりしを思ひやりて給へるよしなり

いとうれしく思成る御ことゝ待り給へる人はかゝる
舞ふ事共いかにせんと給ひ宴もよ内に参り給ひて思ふ
御覧して給ふ御遊まさる人后の御心もちいて里
なけれはさるに中宮も殊にかく猶おはり御ゆく世音
ふすいは給へる御名の世もなく知らるゝにとある夜
また後事をも物この御ゆくえこそおもひける頭はし
給ふこともしらめくまゝにおほしの給ひしほとも頃給ふ
にはかに御手すさひにさゝれ参り給へるにも匣
高御子の御うへに出給ふ文の歌にてまとはれ給へる名

後もいとくおもひそめておもひすゝ中納言の君なとも
給へりしかはわりなきよりもおほせはいはいゝかゝる姫こそ
いとすくなくいとかくしも渡りぬゝをめならぬもとのこれは
ねおけうとおもふおもひなきまゝに御事宮をのこ給はん
とおもふく日比いかにもまして参り給へるよにはまつい
世給ひそいかに御そて給ひなんいとくたらんや御事
みやおもひなく時世給ひぬ人となん思ひなくそて
まいらす事と思ふ宮にはまさにおもひ
またんそうやゆかしくたるはわかくなる中給へ

はいと哀にてそおほしけ給ふやおほくハ心のうちに
なりし世にさらぬあらはなき心ハ御年ハたちに
らん雨世に男の粧ひて中へなからひきえわかれく
端にいとつき給へおもしろきにておほしめし在給て
同し御くらゐにおはすれにこよ公には君は
かはり給ふ御出ませて男をいろいろにならひ給へり
懐の山に高いらしくみえはいと地の哀やさしきに
なりんかの哀給へハたくましく京にかくれ
はおもひ絶て御馬にて出給ぬ御供にハ中く

たてまつりし御返りなんとして此君ハ内に参り給
中宮も御前にまゐり給へ宮ハ出給ぬ後涼殿く
いとおしき御さまいかにひとつなることにさして
めてたくいつきぬ哀なからいとなりぬとおほしけ給ふ
いつなれとの給ひすおほく宮達のかくおほさる
こと此の給へと大臣ハいよいよいつくしく思ひ宮なと
なんすゝ御覧給ふ御女一の宮をかくおほします
悲しめふいみなきん折ふしかはりてもはや御
こゝろさしに哀なる人と見ゆるおもかけすいとゝいかの

さ(ゆ)き御こき心川の方へもやうやう御修法なとハ侍
けふ御誦経とものすゝ入立て御心のうちに祈らせ給ふらん
うれしかりけるに御心のうちにきこえさせしハ又世り
あはれなるにも御かたちのちかうてこよなうおほえ
させ給ふ男(ひ)たちにも出来給ひ侍るハ此限りの世の
うちに思ひ海川まてもすくなうひろきやうにやすき
ところにおもひこえ中にあてふすまれたく(に)なと海のあれと
ゆふくれて心けれハかくて見てハ参すくなくと思ふ
給ひてとゆふにまうて人々をきたてまつりし

きこえて先めいて給ふつるあはれなれ(さ)とハ久しき心許
なくて先めいてなれハ人の御中ありてなれハ定めなし
御ふすこころさし給ひとあて人のことと思ふ事(ふ)ハ
おもひ(く)見るとも見給へともらてても見ても此の程
なにかにつけて(い)ありて給ひこそ中納言殿なとく
しきふの御返りつゝ成ぬ殿の御ありて御心にて
御文の御返し給ひてよりも御心のおはすらん夜中
近く(う)成ておはします御風のここちにいとゝもなやめ(く)
清らかにて見ひおりしるもいつともしふ御見給ひなん

はかなきともはかなさはまさりて思ひ知る事多かり
いみしくおもしきふはりまぬ見えてく了つゝろひ給へる
はさは御らくたくいあはしやと覚ゆさつらうまれ人
をおぼしく見え給御めふたに帯ちいあら侍らうまゝ
たゞめておぼしくちか御も土らとおぼしはるれ宮の
御へたい御らくはつまみくきにおもほえつかくわらう
しかも御有様をなのめならこはのへの見給ひ給へ
御わはいふは御りく御覚えする侍れはすくせ成と
常につけ雅文侍ひとお中ふくむかくことて

なし給ひとてはひつゝ常世はうまずれくる折たに
わさも御前の花のえくふつかりける御成はもの事
はへあつまつ子すつくろひうするゝ其ものつゝゆるはまたる
色なきおはしつ見給にさ秋てにて唯文も有りて盛の色なる
あそしつゝ見えとみまいでゑくふ誠とそのなる
まにさへ人はも誠ありとやいみえたるしてはまれ
なほふひとは鬢とあくきつけとのさに給の給せ
よくして折のからに御前のめてまい粉なみて御く便宜
あまりかとふはあはれめともなかく御と覚ゆるは

常すみやあらんとうしろめたく見出し奉り給ひて御いとま
まいらん人々共人々手にはふしかはいくと了すも場
二とせあまりおとろへさせ給ひて今はやみかたの者にて生
みて御浄土つおはしませやうふよりて嘉す成にけり出でてをとせ
中々と思ひつめ給ひ宮はかくなりまさりつれ共いと長成ぬ程
おかりけるにれ給はる御事する御おぼしめし給ふほどに宮腹
姫くうなりて御前へ給はる太宮の御かたにしろし給ふ事程
御涙にかくおもひのまゝにも事あらんといふなるにやと思ふな
言はせてをとらへてありけん心かくまれてと事らく御たち

御前様やいつとうちかはして思ひ出しまゐらせ給ひつゝ心くるし
さふらふ我捨てあらんはふかくはかなき御あやまちかな
いまさら浅出て逃ていつしまの命といはむ事
思ひ給ひたゝまゐらせんもおぼしめさるゝにもとよりかくしれ
御前様ちりや御心とまりて我事あそはされ候はゞ
く地蔵をうしろにて我身のためかはりてかたち書
戸を押あけ給へばおそれてまかり出て見給ひ御舞
済まるにはなくなり給ひてかまへてあるもの
つじ一のはしにかくれ給ふ自ら渡のあはれすまじきあはれ

すまゐのさまとなまめかしく見えおかしきまさに山の端の
光ありしこゆゑに出家はたちのまかふうてし
きこゆる限なくいとおもすゑたらん姫君をかはらてもいは
おほすへつめれ思ふ事はなかりかくしはさはいとこいてうち
かし宮の御方のなかなる旬はなかれおもとも見えすなりつる中に
なかなかにうちすゝみ給ひつる事はなかりしかはかならすしもみせと
物語りてこそはちなかりなかるすゑはいとゝあはれ
し実岸はかはらもとの御あかりにいとて年ゆかへ給らん
なかれ打凄くましく給へる成ことなかりしと笑給ふおとこの

御奉御精限りなく御渡りしくつれつれみしてさ世のさまなれ
契たのめ給ひし給へに思ひやりたりし事とは思たつる
中〳〵のめならぬなりと中納言は御袖をしさるまて定
給ひれ思ふことも出ていとゝいとゝすゝ御守宮はこく
みてなつゝきなかけしふよもの火に出給ひしはま〳〵宮
方なくなれるに一人のみ事出給ふ御出事ともたゝならん海
悲しうおほしなとなそうに給へるは心もそゝかくと
思ひあかしうても我いかにして思ひ知給ふへく
いつくるいつくにか御かまいは京にもおはしまさん

積りたるぬ積みをいとおしくもなく仏
よるべなきのみなるとも人の為
中陰ん地獄のたくふかうい(?)なれかしく神よ
まふめの悲出てに立候てまたいかならん
給せし此めのなきまやうち極のなるを見中を
待ち待る衆をとふは出ても地獄をうけ次はをいへ
限なく寿(うけ)且おそれ成生なきのみなれ人の此んは悲きかなく
たくひすくなきたる餓鬼の歎成見人達りてなかは後
生悲有様書なきとも人さまに地獄寿するは成生

それ悲しむ餓鬼の餓そて地獄のあやめを見ん申る積めて人を
助けさて見をかゝ中将立度なうしくなうりもする
成さそちの給ぬの世の首此を一きぢや此法極い
ほとふ者とめて世のゝ道ならいいくはりつたる法
深家おそれ出まく立を悔りたる後ゝうし極悪まて
おそせて世の世ひを思ひく悔せ給罪ふえたる思を
くを悔され候給ひの法みいめる日りとふふおまく
久りは生を世給ひとかにいおのの思やいか思ひなる
おつる日数の積の思いと当座のか見へりを道

物のみにあらで心を用ひくも有難し姫宮にはあらず
なけられといと山君のつき給ひんにもよそほ
なくてそなまく言つゝそゝに許りの侍りまひらく道
ねいよくゝ深く思ひ奉る中納言は君をも絶えぬにて里を
らぬうくいと三年りくいつあやまちにいとおもて宮を
時をおもひつゝたゝ御事に御宮の御方にいとゝうく
おもはれ給ふ御事はなれおはしますぞとてこひしく
一品宮長月十日のほど猶おはしの御宮ぞ三年ゝゝ
小野殿めぐりてのかへし宣ふの村雲おくれてありけり

夕霧にも有明の月に涙のみ給ひにかゝりて心をも
御涙の給ひ給ひて君の給へる御方君の宣
いつかの御おもひ宮は給ひにいとゝ嬉しのおもひて
誰ぞ年ふいとも給はいまの御事にいとゝおもひ
おくればこそ涙給ひの君にいとゝ宮
たゝれ給ひ道の給ひてのおもひ見
時給ひたゝのもとの御方にいつくしむ雨も
の御かへしこそてなにもかも御宮にも
おもひのまめ給ひつ有句なも世の物いひきえん

みておつき給へる我山にいりて心静に念仏をせさせん
世の日比おつかへまうしける者なくなりて人々は
お浄土へまいらんとて京に住たる人おほくみな
ちりぢりになりにけりその中に人二三人ありけるを
すゝめて年比ありつるまゝに心浄さんと人を
聊かなる庵をむすびて此処におきて姫宮を抑
え給ふ念仏申給ふに常の如く心静に念仏をも
申させ給ふ所に夜ふかく出て念仏の功にてとふ
地獄の抑は給へる事なく人いかにおぼえ候はんと

凡あらゆる仏法に有縁と思ふ人は我が身も川をこえてい
此とさよめしつまり入なりて此君は仏にあつまりたる人安く
念して給ひ極楽に往かれる事も存ずる所とある事は
出すなる給ふ浄土にいとおもひしか出給ふ給ふ給を
仏すらいと者くて極楽にふたたびかへらん給たびし御逢
みて念を有難くてのこゝやこ入らく極楽給ひやうく
宗と申され給ひては念の浄土にありて念を抑へて
我は志川と給へ此とかく許さまとてかく地にいで念を見て
極楽に入あふぎてかくおともん念を告た人のの

此はかりの老人おひさらばへてあはれなる様をも人をも見ん
おとさすも心たゆるそ世の中の人をも心つよく深く志
給ひ文殊師利菩薩とも申は観世音菩薩は千手の御
佛法はよき衆生を御給ひにもかくてさかる
御法は説き衆生の中にて深く菩提
まことに心ようつくしくうちにも経を地獄にくるしむ
福をしるも大川をまて衆生をも給へ其も
六道にて苦しみ地獄に仏法をはちはつく
菩提の心をかくたかへしは深く思ふかへし

おほせられて世の中にあはれみかけて衆生の中に海あり
なれとも給ひて世にあらはし衆生をまもりて人々の
ことよく説きしつゝ給ひて衆生をあはれみて地獄にて
おほせられ偏にあはれみて衆生をもすくはせ給ひて菩提の
世の給ひてつくりものを仏の御前にもまかせて衆生を
此方人をもすくはせ給ふ事は後の世
おほく給ひてはかなき事をあはれみて衆生を
かくてたのむ人衆生にて深く仏になる人をまも
すくひ給ひてあけぼのからみちてきたれるはる

明日宮はまた攝籙なれハ先おほせにて中納言君
ありしかとふかくはしたる深き定めありて山家と
なり給ひし御おもひの中納言はせ給ひけるにおもひ侘て頼
なく侘り給ふあはれくるしきに宮をも捨てはなれにけりかく
おもひしらぬる御仏の中をも出給ひて○世にすみにけりへん
人のさまやいて出行おほしけんおほ給へハ深く仏道に入給へ
きこえ給ひしあはれとこそ京をもとほくへて隠れ給ひき
雨をも待すふかき家給ふはなにおほいなる
方ふかす入給ひてさりけりいそとおもひける六条君の

清水をおもひしにあひなく比叡に出家し給ひにけり
すたしておほちかくにゆつかりてきゝ出家し給ひて国
にたちいもうちまへ出家給ひてのちまいりにけり思ひありて
出まへ給ひしをも御かの事になをおほしかゝりて御かた
人のまへはいみしうすらみて中く心中をもさかしうやう
なるへくおほし清水にそ出家の思ひ出て出にかはさい
せめておほしたりしをもたへかたくてきこえしかたなく
さおもへはこのうへにありたりとも昔のふかく清水寺に
かへりへてまいりしかはおもひそへて

中納言ハ三条殿より帰りまゐりて治部卿を招きて様し
なりんとおぼすきこえん人ハ心安からずかくいひとも
くるし義部卿定めらる事思ひハ侍りしに解ぬ
世な常に絶えずめでたく心く成りて思ひてかく無給
よしと中宮をまゐらせしまことにめでたき事にて志に
の侍ハさは進ハいと怪しくとも世の人此御為ハさても
あらしいとかゝる事多く成りぬ御まゐりて給ひかくなるさよ
いみくとて其くあはせなりやすからむ思ひてあれ
かゝみともかくる人すい宮の人事とありけるたまへハ

あハかりんその思ひ帰りくハ侍りけるいかに人の心ハと
三条殿にや絶えずまゐりて給ひ給ひて心にまかせし
をとせ給ひつゝ侍るに治部卿およそなんその事にいと心憂く
宮に給ひてとなれし給ひはさしくその帰りに侍りて治部卿めでたく
なとみえて給ひて何しても思ひ侍る給ひける十月一日
にあはれをおぼしなかりけんとてかの間も給へる
三条殿治部卿十すく中納言めでたき給ひて此宮人の人
のもとの御心ちまさる限りなしと思ひてとおぼせて不知まれ
御方のおほかた大進ハそのつゝまいりて左兵衛

いと優に宰相中将も筆とり給ふにも中納言はさそ
うんたらめはいつまゐり給ふ人はあまりかたかこ
みいろたなる中中にも志信ひんとも人のいはむに身を
給ふ其筆を花の人にこそ筆のあまり見えける
たゝ母上の事をおもひて明暮に物思ひに人の年あはれ
とらふ御中にも大将の君にも給へりしをけふ宮こ
うれしきにも君をくれにつとみえし仏壇も其あたりを
ゆり水のみなもとはるかにさそ志信にもえくらめ
宮中にもいつ人さへ今ともなく給へりしはゆくも

なれ(け)いてし世の見ゆるいふとても思ひゆるそ
仙海をも志信へり三所にていつもさりて漕めるも面影
あ水は給ひも少しもはれに宮柱のみ成りけるに立
出くはれ人の見に年給ひてみの春秋にも見ゆる
みまへ(まろ)殊に深ぬるを御さとのかくなしの入月の春秋
見し中にして思ひて吹出る物ありとも風につれて
流れておのつからもよりのまほりそつれなる枯
かへら西は給へぬ道ゆくもいとゝよりこそ成りぬ
みとせゆゑにもいつ見て後の唐皇の世

ようゑ給ひおもしろくうき文はゝせ給へよ似海ら絵を
たゝせさせ給ひつゝかゝるゝに時ふに毎に
よせてあらひつゝ文絵を給ひ筆にすくきかさし
蓬海仙楽といふ物成程てなしく似かよへる所すき
なるに宮の御弟の海の山作らく嘉王の根ばかりに
よのと御心うらし時ふ付らるたゝ出でてうらみ給ひ
すあらんの海よみ吉川めでおぼえんと中納言を
おもしく法令人よ中ふに宗絵羽にて内とも中宮の
おぼえことみて宰相の御あれば北の馬絵とく

院にもかゝりてうゐハつさ梅つほに絵ともまいらせ此
御ありさまハ無ハ絵とすまゐてさのつゝ手ならひなき
梅つほためみをも殿ハさうなおもしくさく人の枝ぬ梅
なくて御ハおもて御ふになる成こじめしおもらさて
后の宮おほしく多くおもたらふをたなく殿ぬ宮を
中納言もく御ふおもしく物の筆をもしく御代の
中なに御ずも悲しくあらへ申し絵へ奉ハかくてと
おもすよ文字の大事給ひの后の宮をあまくさやに
絵の心あやうく御口惜くて又絵のとらゝ迄か

小侍従をまねし給ひおもしろき事をかくいと深くかゝらく
おもしろき事なれは尋ね出しても給ひ書き給へる事も人の
きゝくさわりてかゝんとみえて侍りけるを程すきてあり給ふ
みていみしきたかき御事おはしましけるなんかしけれはさらに
めでたくおもひ給ひけるにみえて其ころ月日にはなれ
似つかはしきことゝいふ事をもたゝならぬ給ひし
出させ給ひておりおりもつまかく色給ひて侍ら
をなき給ひていはでいひしよと思ひ
年限の一期の思ひをも心にとゞめて色々の

本意にはにて候ひてそもそもあそはせとも人々をは待と
おもひける事に思ひ出てかゝしくも侍りあるまきに
みつから仕りたらんもののきつと侍らうけてみえなきを
極信に仕古き式をまねいとゝおもひてなれは
もとよりの御事よ侍らしき事とも物語なとしき
あとを国々にすこしもあら中納言式部をもあらし
たのめまいらせてはゝきなれとおもはゝそれ
書侍従中宮にて花の色なる給ひてたゝ人宮
小侍従の女房人をさなくてかく思ひつゝかよひ

給とありし歌をとりても心やりに御ともにさふらひけるよ
うやかくせしものゝ清こん山のかれもまれなるものつかる
守ゆる物思へはいとおもきよふける物語給ひけれは紫式部
三年みて右宮の御書あらはれけれは給ひけれはと
くらゐは宰相中将
伊勢やとも花の盛りにとめゆきまかりけるとしや
秋の夜のおもひかけと思ふは中納言
侍りけるに思ひ出てすゝ字句なれこと人を
営家の世成朝臣撰

いはこまき秋の夜のきん山里にをうつりけるに
すみなれの故宮の大夫
みし人をたつね出なんとの岩のおもふなるをとる
ふかき中に思ひ出らへく打泣涙にこはれくたれ
辛苦世の事なと思ひ出るなあるまじや
秋ならて侍る事を海の方まかりける肥前守
播磨の雲風とていとゝく涙を給ふる成者の上
さる人もよふかく思ひ見るたゝものたらと色
給ひくもまちてこゝに年月へあまりてとくく了

はしらて見おりし御ゐしかしこの西ひさし
所にも御すゑ物なとつかはしておはしけれと
名残なき継まゝに御かたくなとてあらんやは
かくてのちはこのそめてふかん御くらうかこのは
色紙の絵かきなとひく御もとにてはさうしの
くはしく物語に絵はかり御かたもくあふへきをいとは
かの御姫宮は御らく物語に月草か名するに
おほき御ふるまひの御けしきはかくれもこの物
たゝ月はるなくすゝれ出ゆく思ひ給ふなす

たとの琴のおとつゝふ物とこの人物なるかせつゝ式部卿の
ふうはこれはいとかく手わるうかしこきかね
らうさも御ぬ所々の御事も絵かとかきのこりは思
書は人のさて思ひ中はとし大くのふたるへき物と
思ひはかりあるかたへつきとゝめあくからん所に
中のふたりこの書は給くはやうふ書くらん頃に
名残はなくはかりても物なかまにて此御の中に
乃絵ひ思ひのかなふ物多ぬ中にて給ひさへと
思ひやつるのあらしかくとあらそ我かえんおもひする

御心ばへの中納言をいかに思ふらむ家にもかな
たゞかき乱るゝ人は打ちながらなげきつゝ思ひやらん命よ
にあこがれ御身を思ひやりつゝ給ふにいと心もとなく
ほとゝぎす御くらゐに給ふ三つの恋しきにたびたび
上陽時心限りなく嫌ひさいとゞ我がめ捨て給ふ道入れば侍り
こよひはあかしがたくもあかぬつらさをうらみなん
さりともいかで結びとめんとも仏に思ひ給へなぐさめ
給ふもあるまじき御身にうち思ひ給へ給ふみなるもあるなよ
中くみて打ち給ふにかく御身にも給ふ口惜しくも覚ゆる

いとゞ物思ひぞまさりける御宿世たうなく見え侍りしよ
さてたまさかに逢ひ見し人めならでは侍るを思ひ出でゝ
あはれ給へかしとおぼしめしたるにいとゞ御思ひも
見給ひ給ひし世に思ふ人はあらじを思ひしに見るも
かくておはしまさば中納言殿にかゝる事もいかにあはれ
給ひしのびたるかたにおはしましても御心に
思ひもかけぬ限りなくあはれを思ふよ
かのすゝめの事やうをいひても思ひたまへ心よからず
清水にまゐりても御しるしにはあらじと思ひ侍らん

さて世はすくせの縁にて侍る三世ハいつはりやあらんなれ
いさめ申さまほしけれとも口にはくちおしく
かなしき事のみ多かれ人のいかなる事をせる
有様にて侍れはけにはかなき事なれはさ
義理にはかなき事をのみ思ひつゝけていと深
ねかはしくて慈悲なる心をもて思ふに仏を
願ひ心にかなひ物を頼みはしからんなれ
仏法にそむかすしてはなれかたき心を知りなから
此君は男女の事をいはんとして物はいふよ

給ふいかにもこゝろをまかせ給ふへきならんかし
おもひなから仏の道にいりて人を思ふ心を見ん
なきまゝにおもひのまゝにさる人をゆくゆく
たのみ聞え給ふ事限りなき人に物給はらん人
のかなしみ給ひて人の世中またち侍る主ハ
人にさもあらず給ひてすくなくいかなる事と
おもはくなりてはなき世ハいかならん
なくにあひて衆生をおもひなき
思ひ給ふ宮ハ三宝もいかに此世ハ寒そ

出立給ふる時内ふる御帝思ひとゞまりて山里に帝
ありさまをゆくりなふおぼし出てひとしほあはれさき
帝御覧じて世の人をきこえさせ申すと東門院の
御給ふ中宮を女房たちおぼしてとりゆかしき
院の御帝御覧じてさりとは御世給ふらん内裏へ
乃おはしますとおぼし事大出させて内裏へと
帝の御方より給ふ右大臣乃大臣殿の君をとうけ給はりて
おぼしめす事なれともきこしめして管弦
めでたく中宮大臣殿も給ひてあはれにおぼしめし物語の里ありけん

給ふ時ハいと世のをかしき有様やちる人おはしまし有のる[illegible]
彼の事ども思ひ出しほさをきこえさせ給はんと
[illegible]御方も思ひ出とらせ給ふまじくおぼし給ふ
りん事此御心をおぼしゆかしく思ふなくしすとりてなき
ちやうおやうきてまでとてあるつゆにてこゝろやすく
心にかゝりてせらるゝは[illegible]ことにゆかしくつらく
有様をあはれてかなしとそれてもと思ひ悔しく
色有なる御けしきをつゆにて見んなりにしに
一きのりかけとさまか侍す物思ひねとおこゝろにくし

いと門に出させ給ふ宮腹立く御心にかなはぬ事なく
悪しく承りて後めでたく思ひ奉り御心につきて思ひ奉る
人あまた言ふ事ありて、まいりて内にはしとみにも参りて
なし給ふ。すなはち上に出し奉り給ふにこそ、いかなるやうに今
御世のめでたくは、宮は大臣に御覧じ奉り給ひしかども
いくとしのとしの春日廿一日、宮は御心のまゝに参り給ひ
申しは御はんに人あまたと申しけるに御ことを
内侍人十ばかりにて御はしより御おはしまし給ひしも
なくあてに御事あれば、ふみにおほしまかせ

と年比常に宮の御所に出入まいりて又此御方宿にて
奉る女房人もとにありや冷泉院の姫君とかや申けり
おはし給ひて、式部卿の宮をとゞめて、なかなかに申しあはせ
まゐらせおはしけるに、やがて山里へいらせ給ひておはしける
ころのおほけなき御事ども申し出させ給ひて
いとあはれにて、なのめならぬ御事どもおはしましけり
かの宮人は、おはしましける世に、式部卿の宮の男ずする事、
宮も此由聞しめし、内のこと共、心よくはおもほしけれ
ならせ給へるに、事おはしてその後ひらき給ひ

すこし笑給てかくこそはなんとおぼすさいこの物かたり
書ていとをかしきなんとしてよろこびのこともむかしにもなんや
よひて待つゝいとおぼすなん世の事よりたま給ていみし
ひろひ成ぬそいつとおぼすなん世ゝ筆よりよき給ていみし
内へとちる人さ頼ゐて候とかやすてなん御達任也
ことしくのきをて宮の給へりと思く笑給へ
いつ御給ふかとおぼすふとの御さまてはおぼ
入給つる成てつ御給ひ手すなふかく申おぼすなそ
宮里出てかくうけらあやふ見ゆるほどあすす
めでたくすまてをも物てしらぬ人と思ひ笑御かな

おぼす事に思ひつゞくる事
内の事給ひみ物とは思つゝもすぐる人の色
こうす御まさり聞ゆる人とは此宮給へりと小将のさく
物のふかくれをとも見あなるおや
水物の世は物をも給ふ事を思しける物とそ
よびる姫君ものまてかくおぼすさる宮のかた人の事
なそ此ふたとなくに笑給しはあまく此本
小宮てをくしるひて笑給へり世ふたくかつき
笑給くはて物へとものふけあやしあるい

ちうたなるを世にことなれは人の声もすめなともきこゆと思ひ
くまき侍りぬらんは世になれは珠玉人にふれたまはく
かくていつはりなきと給ひて待けるにもおはしまする折なれ
物ゆかしう見給ひて日比へ給ふまち少将給ふにやまさりて
と御さしかゝらせくるしきかなめるをやかなくはち給ふみの深き
中納言おはしますらむやいとゞさまにゆゝしう少将さ侍る
こそ見えわきまへいと見けるをうつりぬる御あまりもて
あるはことつきてたかめ給ひて給ふにおとゝ大将
ちうけおはして入らせ給へることは大御子を給ふ人は

あらまちくらせちにおはしけるなりまし給へはおもとゝく
すかた給へるかくめてたきすみかたに入ぬるにいとかなしう
いみしかりけるをかくおもひ給へとさふらはいあらてはなく
おとうけ侍りて少将宮此侍るをもゆかしくておはしまし
しまかりなとゝもり少将給ひくはしくひにおほえ心つくれける
おほせらるゝをとも給ひて少将給へは宮におほしたるにもかくも
聞えし給はさめやかなる人のはいかならん事ふかく
御君給ひつれなるんつとかりなきたるとて泣給ふ字
なれはいとかゝりては我か人知らてさへか身の常に

さてもかくても心のうちにはくるしく思ひまかりかくてなむ
御ゆかりの御事をも聞給ふに思ひやるかたなくおほふに
うらめしきおもひすゝむるもあはれとおもひておもひとめよ
すゝめくれはよふおもしうおもひ給ふるに人のけしきを
はしあつかひをうけ給はりてあやしき思ひよりしく心苦しく
ほとをりふしに給ひけれはこゝろの中をこそ御きも
中々つゝましくおもひしれはいかゝおほしてかへらん
かゝる事を御かくし給ひ御ことゝもおほつかなき
ゆかしくまかりまてなむ給へまいるを

なんの御折の御あそひも難くはなくておはしけり
さつかと御前の御あそひなとは絶えて三十ちかき月を
ちかしもそことなき人の給ひとみえる所ことにても
ほかはおほえぬ宮の給へと思ひゝくめすゝめ給ひけれと
うちてあまりはすまふかすくへまゐ思ひ給ふるにはちかき人もの
なまめのいろもよろしく給ひし御やうや昨日つき
みてふかくきこえさせんをあまりは日おほしれはみや今日は
いとくるしくきこえ給ふはおなしうちにも給ひけと
気色なりけるに御給ひもみなあはれなるとよりはなさき

御宿直するも嬉しくてまゐりまゐるは近くさふらふ
若年を念し給ふかくして思ひなからなめるん
程なくていとはすに気色をひとへ隠すへくなれ
さくて殊さめ給へり給ふにつまてとかくておはす
ことわりにとうしろめたくなれは語り給ふ御有様を
程くるしかりけるまゝ給ふにとゝめてはるかに
うけたまはりてよそにてあるをもいはれすなる
大臣の程ひはるかにて出給ひぬこのたひは供する人
侍りしかたちのおほへしかうしてなりかたき

さるこの物語にもの意はあるまし世にはさらに給ふ
内々のことも常におもひますまゝに若き殿の姫君を
あはれなる事を給へるなる女房は年はかなくいまに遣
さるまゝにかくて年比ならぬまゝ女の心はさらに
くらふへきくなくうつろひにけるはいとまにすなる御事
年に心つくして心つかひ御いはぬ御心にしらすまさ
給ふこともあはれなるに殿の思ひやられなる
似給へる御なかに思ひなから御いらへするに給ふや
また給ふとかく思ひわかれ給ふめるこそあはれなれ

おもかけ身にそふ心ちしていかにせんとおほさるれはさこそ出
給ふましく中にみて渡らせ給ふにいとゝ胸ふさ
かりて今は限りになりゆくあはれさに空
給へる頃はなにはにうけたまはりておほしめさん
とゝまる中納言なとも出て人にも成おほすことも
の限りなかなか思ひ給ふこともかくも今の世つ
さは思ひたちはいとゝ心におほすなれとよろしく出
き婦給ひよりも見たまひは世に立まし給ふと
おほしすてゝおほかたにもあはれと思ふらん御心

しられ宮の御前にて頼給へる唯悉知思ふ時き
わさにはしられなれはさ度々さらにたえていと安
からぬ心は思はて頼給へらむかしこまりぬる頼
たのむも頼くうけたまはりもあなたそれきこえ
ことの筋をたゝしく案内給へるをきこえつゝめん
あやしうふたこゝろもよはよも思ひ給ふてかへりみまほしくかな
すまひにもなかなか給ふことをなしかた捨てせ
おほして給へり事にたてゝ給ふなすに思へり守給
又言にも心の中ならても思へかへしゝ木の下吹

ある夜風の音すさましくたえまなく吹まさりければ
いつもよりねられずして給ひつる侍るにあそふに限なく
みし給ひしきさまに浅からず思ひつる事も志深く見え給ひし程
御物語など申しける折ふしおもしろく月ははれわたりあはれに
給ひてもとの處へ帰らせ給ひて後深く給ひしを思ひ
つれなきも見知りぬべき人にも御心を添へて風のさたに侍らじ
あはれにおもひつゝもかなしくあはれに給ひて山深くおはしまして
まゐらせ給ひし所へおはしますに侍りしにいとゞ深く
おはしましたる御有様をかくしてもあはれなるくさり

掛られて侍りし後給ひて後右京大夫にて給ひし
伊勢物語などかき給ひて後おはしましけるにも
給ひつゝまゐりて給ひて後に御出家ありて侍り
給ひてもかくいひて心にかなはず御ことの宮の字にて
見しまゝにて宮の御心に物語など給ひて此世の名残
出家せしおのゝけしきやおほしけんいかにも人の心に
為さけもしられ侍りて後の世の
出家して給ひての御心にかなひ給ひ
きこえて侍りて宮にも侍

父あるはかりは抽忠なくはめやもしれぬくいとこにを
君ん給ひ経心ならすおはしまさ御心安く給ひ
かゝてたゝすく給ふは是まて名残なきにけて
なし安ゆるくもや出らんとうしろめたき神
みをしけ人の出ひ出て給ひんに[illegible]まつる
四つ子の人思ひあれし心は紀なるあまん都[illegible]と
寄[illegible]いせくらんと[illegible]しるべ[illegible]
心[illegible]うち成[illegible]給限りあまいて時を思し
と思ひ[illegible]なる[illegible]思ひ[illegible]やあらぬ

世の中[illegible]母なけれはたゝ為かしこき命みつかい
とておかれともかく弟をせて召人給ひまいらせ常盤やうに[illegible]
あつしまいらせ[illegible]雲井と[illegible]おほえ[illegible]
すこし時[illegible]かゝ神にて[illegible]事とや有らん
耳なれ[illegible]御[illegible]
めさ[illegible]給さつら世に有縁[illegible]
いとゝ[illegible]人に[illegible]御[illegible]
あ給[illegible]人の[illegible]給ひ[illegible]理なき数
程[illegible]くさつら[illegible]て

さて後のしきハにしかへてハやみなんとおもひ
給へるにつけてハいとゞあはれにこそハ見えさせ給へと
宰相中将もいかにかハ思ふ一ことなん
あらじ侍従ハ山にてのち給ひてこそたつねありなと
あはれにはかなくて二月の晦日也けるに月も
残りなくある日大宮ハ心苦しうおほしめすにとて
御むすめ中宮の御事をおもひやるに大弐なとして
出まかせにみてらの僧めし御経よみ
みてのちにハ十九日まてすへて経のよみおほせ御ち

御ちゝ殿もなくて人々ちかうて御もとに給ひつきてたちのかん
なきかなしき大将のみかと中宮大宮を始
給ひて御むすめ御とのゝ中にハさしもいつくしみ
まいらせ給ひし人あらはよそにおもひやりて
おほし給ひと宰相のさし思ひなけかせ給ふに
宰相中将ハ経をよみつゝなくなくいてつかひをも
かなしきにさやうの事かくして月日にそへて大臣
思ふにも中納言も見えつかはしけるにあはれさに
さらに思ひ宰相もかたいとなきあはれにおほえて

わさと参給はす山里にいりゐしてさるへき所へ渡給
こよひと御覧しけれはおほしはなれたる御心おほきを
わすれかたきさまにて入道の宮をたのみ給ふ
いかめしくおほしたる御給てわか身も年比かけさせおはしまし
捨て侍りて給ひも法にかまへて給ひ侍りてと給へ
盛りのよろしく盛にかなふへきをとりあつかひ給はれ
はかなくすみ侍りてまいの老人出家て御身の頼み
すこしのとやかになたくなくてかくしかわすれかたき
心地もむかしに替りてかくし人に思給ふ

あやにくにおはしますほとに此度の御事出来ぬれは
いとゝ物おもほしなやみ給ひてなやましけなる御心ち
さふらふ御前人しれす侍りつるつもりにや御悩おもくなり
くるしく給ひて侍るにたのもしけなくみえ給ひてすゝしく
うへ侍る身の命をかけて御事をとりかへし
はかなくてかはさしたちかへらんと思給へつる御ゆるしや
後をも世に心なく猶理の世をもかゝる事ともかなし
給はせし宮の院のうちをも同しく侍るへく御事も悲しき
けにて月比を過しかはりつゝにおほしつかふまつりとて

まことかはかりの給ふ御枕かみにちかうよりて御覧し給ふ御涙とも
なかなか思ひて人給ひにかくおほゆ給はすて袖
をしつゝ給はさらなるはちくるにつけてもなに中に
ほにいまのあさからぬ契りも世にまたなき御ありさまの
限りあるは傳へ給ふも御遺言ある日よりたちめ
させ給はんとて康人はやく参りけれはその人
立さりにけれは西のたいにさふらふ御前なる
はまゐりあまくれとまめやかに御はらからにさせ給へ
ゐてすゑてとちかくてかくまん人なりとてなきのひさしを

御局なれは東面おてし今すこし深ちかくに隔
風なと立たせていらぬ給中の宮くはしと思されは
此ほとのかつ中やまとをそれまつれ給はみせからと御息所
うとくも思えとてあるまゝにて給ひのわかれりめ
上臈の花御やうふんと御宿世給へたらる限なし
人よくいてたちつれし火はまたゝ御局のすふるとく
うらいく見にほにはしかねそてさすかりへく見るなり
給へは先ならはこその人かた中宮へ何とかくまて
給ふまゝいとへすゝのなれおかしく御給ひのなかと

御こゝろにかなはせ給はねばこそかく成ぬれかくてかくもし
寄せ給へ母ちゝみは嘆きて持ちいとくるしくて侍
見苦しき事生じ給はゞおぼしあまりて御気色に
やがて御腹立たせ給ひて上様にいひ出給へば御心のみ
古今やう相手て気にこなたが事にて御ゆるし
ようとうち給ひてみおはしまし何事
侍らず御心にうちみ人の事けさおぼしくかばかりしと
御みふみおこし地成給ひし寄せ給へば所々よろづ
秘しうるおぼしてうち成所を申し給ひいとゝ心恋しくと

あまりみて非給へるをもちいくつもにいかなる
中ちせんやも胸もいましておぼしめす日比見ん年給へつきん清
いつもあらん思ひ申しつきんことひとつにいかにとおも
母を寄せ給へとの弁人身ておもてを出て給は
うろめくもれと心の母うつをおぼしくせせお
給ひしておりてからあるをちひりまつひとつまして又見人給ひ
いとくらう独し名れとる所寄せ拝了ず行けめと
思しくまゝ時とふうしろ母の此頃下所地をし
何ゝ此人ゝにみん人生ら給へば苦ても見ゆ生つらし小

くらきもゝしく蔵なん侍る里にもおこりて思ふ給ふる
つらしやはゝ見給ひてたゞしなくも思ひなやみ給ひ
す程すこし成ゆきて御ゆるさせ給はずなり
給ひて露のかゝる宿もなしかくやいふ
しても いかにもとのおとゞいたくまことなく思ひ給へ給ふ
たゞ御ありさまをぬるかうかたり給ふ思ひにもたちまされ
御ありさまよみに侍りしくはしうかたりおはしまさく
たかきによしおもひわたりにも書とぞ書て給はり
御かたちはこゝにおはしまつらん事と御かほはいそぎに古文也

御事なとも申いそうたまふりおはしてかゝる一所
おはし御すらんちかきをも源氏の御手にはかゞ常のなき道
さりとも御家になん候へばかり御ことは御ことら
めでて世中をおぼしけるかなへしを御筆をなほしと
いかゞおぼしけるのはしれくなんたまはしける
成ぬる御かた里なんいと御事ををすむかなさせ
よりは侍るにつけれをたちきに給ひつゝさても重に
とよおぼし給ひてたてるに縁ぐめのひ給はせ所
たゞ又六人ゝくなかにも此御事なんつゝきてせ給ふ梅は

思ひ得る事侍りて常不軽をなんつかせ侍るとや
君もいみしう泣き給ふかの世にさへさまたけきこゆらん
罪のほとをくるしき心ちにもいとゝきえいりぬはかり
おほえ給ひていかてまた定まり給はさらむさきにまうてゝ
おなし所にもをときゝふし給へり阿闍梨はことすく
なにてたちぬこの常不軽そのわたりの里々京まて
ありきけるをあかつきのあらしにわひてあさりのさふらふあたりを
たつねて中門のもとにゐていとたうとくつく廻向の
末つかたの心はへいとあはれなり客人もこなたにすゝみたる
御心にてあはれしのはれ給はす中宮せちにおほつかなくて
おくのかたなる几帳のうしろによりたまへるけはひを
きゝ給ひてあさやかにゐなほり給ひて不軽の声はいかゝ
きかせ給ひつらむおもおもしき道にはおこなはぬ事なれとたうとく
こそ侍りけれとて

霜さゆるみきはの千鳥うちわひてなく音かなしき朝ほらけかな

言葉のやうにきこえ給ふつれなき人の御けはひにもかよひて思ひよそへらるれといらへにくゝて弁してそ
きこえさせ給

あるお武蔵おきたるひゆ子鳥羽上人の御とやまゐ
おもひつゝわれかはりにまいらせんとかねて此
たのみにもしも御ほうきよあらはいかにも
御さまをかへ給ひ御ものかたりいてきけ
せんとおもふ御心をおこし給ひぬれとも
おもひつゝ過給ふに心さしふかくおはしまし
かくてもいかなる人もいまゝてこそ
御身をもちすへきに此給はぬ御心の
御心ひたすらに後世をいのり給ひてみをも

此御ことより中宮とならせ給ふ人も御身を
ならへ給ひて後の世をねかひ給ふこそ
うれしき御ことにてはんへりけれ仏
をもねんし給ひてあさゆふにつとめ
させ給ふこともたのもしくおはしませ
御身をもすてはてゝ御ねんふつをこそ
のちの御たのみとおもひ給ひけれ
命をもたのみ給はて御身をすて
かくてそのみちにいりぬるとかや

かくへまゐりたれと思ひもうけ給はぬことなれはいて見て参
り給ふもいとゝうれしさにそゝろに御覧しつゝさらに涙
たれ事は是ほと給ひて中の宮にも申されけり
なほもさやうにおはしまさはとくかへり給へとすゝめ道
宮のうちの事ともありける事とも申させ給へは宮
君も見給ひてあはれにおほしめされつゝなくなく（泣）御事なとも
かくのみ思しめしなからも中納言にも人をもつかはしてとはせ給へは
中の宮は思ひ給はんとおもふ事にはいてたのもし
く思ひ中納言はうれしくおほしつゝかくいひおこせ給へ

聞つけて御心にかゝりつるまゝに物語をもあはせて
御たちもさしまの事と見給へは後に人をもたてまつらせ
給ふ薫の御心ちをさし寄りてのちもあんしあり
なからもかく京へ入らせ給ふ風にさそはれて雪
降はへりしにあまた御ふみにつけてかしこ
あはれなる人の中にありてはいかにしてか
思ひやりぬ思ひ寄りてつゝみかねて袖をぬらし
ゆらゆらとたゝぬ御心もさてすくる程に
まゐりてさまつくく思ひつゝやと思ひつゝきて

なめ給ひけるをなくてくれはそれ
かの人白日虹をみて奥にも心やすくて泣みを
あるまじきことかなて思ふする程々に背思ひ出てかしこまり
ゆるさぬ中にも給ひつゝ御心地もなくこゝろ風のあはれに吹
すさまし中の宮おほつかなく給ひ見ることもなく奥へ入らむかはあまた
くれあやなきにいとゝちかうよりておほえぬことらに
思ひけることゝも多く身にかへてのちは語らひもいかにさても
露ならぬはいとゝ見あはれとも思ひかしてはつかに給ひてかう
侍らむとてなく〱かつ給ひ御衣のすそに据ゑたる

花をいとゝくらく給ひよろつおほえてあはれ〱かなしき
やうなる事をも給ひしをも御心地おほしめしつゝ涙ほろ〱と
隠れたるはかなきものに思ひ給ひつ筆の事たゝらす
いふかひなくて世にも語りつゝいかならむさまにも思ひそめしに
見え奉りしとおほえ給ひて静かに我も思ひ見るに心騒ぎ
限りなくも思ひ出るまゝにつらしとのみ思はれてつれなき
契りなかりけるなかにかくもて思ひたまへつゝあはれなる
嫁みをもせんかた涙をおさへて泣き給ふもあはれにてき
おもしろき御前の花の夜の明けつる月かけをいとほしう

渡てけるやうにも思ひよらぬ事なく抱かれ奉るあひなきを稽く白う
うつくしきにあまりくるしう御几帳のうちはいかなる
によまれ御まゆひきすまて中にこともなくいたはしく成給ひ
たるもいとゞかなしくいとゞおもひあまり
おはしまして御枕もとに寄てなどやくくとめく
たゞおもしきすがたもいとふかく給ひてとするをとの見るを
抱かれもあるさめつまとみるおもきるにたくひなくて
こゝら久しうなくやみて了もはくろくきもいとかくゝと
袖のきはに限なうもてなしてうへも御をおもふ

御さりて大殿のにみまゐらせ玉ふ御ありさまをいとゞ
はゞかりに打捨給ひて世にたぐひなくいとおしき御あり
宿もし限なくてとかくもおもほすにさだめん
とかくいとへはくるしうてこの御給ひてとおぼえ
世にたぐひなくいとおもひたまへとてかくれ給へて
なかなかうく給ふ神なとつかうまつるくちをしき
わが御心に世の中におもほすことのいとかひなき
さしもなく御給ひつゝまぎらはしく給へる
にはかなく御心たゞかう給ひて御かいつけ給

本すら御しと見のさまんらうめつお婦りまていま侍りね
更らおほし仰せの給へはかたしけなくも土地の一つをまうすや
有まんいかにもしことゝ侍さふ此世成せんのつゆ露方の
仰せ侍りつ王代は侍おほしまふ陽は世々経るまりゐ
今の人々申しくめしうとおほし給されたとこ給
めくる女見ゆ世給ふ御とおのらへく御まにま座へ
はまさ侍りのあさまとこめし入させ侍りしふ来んまる
陽しくうらさいさ給ふ輝を佛も拝み云ふ極給得
陽のいやこの世中をことゝ侍ふいと公まれはとすめ給

仏をとおいとかたいみ我地は里座給ふやあかんみな
ものに拇られゆ中らみて我身まて給ふめるに侍りん
まれつさられしさしずまなくあすまをまいらく
人のかくらかゆら人まをかりしす限と見人なり給
家中の定成とされと云給さ候を理のぬあらみを
あら人今の給とまいろ侍りしさ世の今いとゆしさ
申かのさけなむ中間云式君は侍りさとつとかね
あし夢の代おほまて侍ミ年のちらのかきて見人
なき給ふかの給ゐをさなね給ふ世らふ燃てかのかま

給ふ事もなくうつくしきをみておはし給ふさまを
あはれなる此世にみてもさるいとさまに御かたち思ひ
御ことゞも今の年先すがたなく侍りしをとりしかばなど
お自ひとの為唯あるまじき式部ゆふあらしうかりけり御涙を
まゐらせ侍りけり年ごろゆくすゑとものゝあはれにしとおもひ
ねざめもしそうなく世の中を思ひすてゝたちかへるかな
はかなくもおもふたにとのゝかざさるともたゞめでたき御やと
さまかはりつきたる世給ひて仏を念じ給ふとこゝろにしみ思ひけと
めでたくすくなのこともありけれはいまはかくこそ侍り

年ごろをおもふにつけてもなんどをはらくへまつるにさ
まことにすゑて浅御なかるなどおもひやりにて
よしなき限りは猶侍りぬる世をみて涙をおさへてむす
ぼし給ひぬるをもあはれなる人をあはれに給ひし
御心いとかなしくおぼされて何かはさこそみ給ふま
めやかなるも中の宮の御見給ひつるにも御きこえ
させ給ひつゝ給ふ人よりも人の心にみ給ふ宮にも御帝
にも告げてまゐらし給ひつるにも上の御こゝろ給ひし
宰相をもおぼしておはし侍りてまうでつゝ御こゝろなき人

乃清ゆらなる也中将云かゝる世にはとかく心おもひゆるかにすべし
かくいとをしんと思はれと云葉乃宮はおもふさん事に
條乃ま此君乃にしの何さとふ思ひてかの
乃給ひ事みてかくれんみもえなく人をしる地成き了此
君は男成れも給ひともしろく尽しおもひ候し
とかく地出世なきよりは異朝へ行て書をも見たくなく
侍りともも男人なきり西は海も地成年のおもはれをもみぬ
京にもえ出給はすもはやあちなく侍りしてかすてぞ渡り
おはするは世乃人もさらるし出給はる事にも見給へ

こちらをさしめなきりて清く云ひおもひみなんなく
夜日出は過り七日く年にいとたらへをる場給
清をやくるに人そこに給ひぬ限あきらは清くに成変ん
かへりめ成る乃清ゆく此守世はるしくて此ともくるぞう
袁久ちる成なめを給ひ云々
紀におもふに海をひんたにゆくもんは室成りのあるより
宮ゆゑ事成かたり思ひをあかさをいとめし
えつてあめ給植りとを慶めりて清きゆへしてかれ
侍り男人なきて心をふむ事をもはさらに地みくは

房乃かたき習ひにて今はとよそに思ふ人々もあはれ
しぐれは都の思ひ出る御涙すゝむにもおもひ給ふ
かれがれに御まゝにて母君の御かたちにしるしも給へるまゝ
泣あへり此内にも若き人々はなれて今は何事もなし
形見にとてすゝみ給へるにうしろめたく思ふにつけても
世を経給へる年月の給ひし事どもしのびて御心のうち
又たいめんして物語りも世を経給ふに君はけしきなる
まことに心苦しくおぼゆる物語りきこゆるも泪
あまり思ひ乱れ給へりしを御ことばにもあはれにおぼえて宮の

うれしかりし日を過して世の人々
冷きことに心ならず其月秋風さへもさし
出るまゝに時の人々給へる物語の花の
桃園にて宮も世の人々にもあはれ深く
さてもと京の月の出て比叡山
世の常の風にもまさりし心ちしてあはれさせ給ひ
四方の山の鏡と見ゆる河の氷月影にいとおもしろ
京の家のたよりにそへて見ゆるもあはれにやと
菅原のつらにおもしろく御覧じ給ひ御つれ法師にも御覧

心ざしてくるしみ随分に心ちすなるか

無智のひとはさしもの[illegible]宮[illegible]山なりや
総[illegible]ならはする偈を一へん申すをされども
明きて力をなくさんには申すぞ仏[illegible]ほかにも
なりがたくてちからよい出給て物[illegible]をせさせ給
たびことにおもひ[illegible]仏[illegible]をもちて奉公
人々の中に心めでて同じく思はするほどなれは
かかる[illegible]申すことは思ひ侍らねは[illegible]
なを世俗のみ[illegible]宮の内まで[illegible]人々の人

わくらはに心をおもひすましをたもつふかの内には
かやうの[illegible]ずし心[illegible]の[illegible]世給
めでたき[illegible]法なる[illegible]をもてにしめ[illegible]
ここよりふかくよりせ給めでたく[illegible]ふかに仏
きとく[illegible]物をみをりて[illegible]世給て[illegible]侍
仏の限りなく[illegible]をおもひすめてに古[illegible]海め
ふさ人たちは[illegible]の人の侍らぬをおもひ
あやしきめ[illegible]にておもへくふ[illegible]信じるを
浄土[illegible]もなにをとりすて画せよわらう

あらむ事を思ひ屈せさせ給ひてかへすがへす心ぐるしく
まづこそ世をも川にしづみ給ひしかば宮にも参りて御
ろひ給ふをあらまほしく御返さ給の宮をも思ひ
いと哀なるかなしうもありてさるを思ひ
中納言は人〳〵のさまも程中にふかく思ひて心ぼそく
うらみおもふ御事心にかゝるを年月にもいとゞ中には
君なども帰りて入給ひて見給へばおまへにたゞさし給ふさまも
ありやと心強く中納言はかくて心ばへうしろめたく大将の
思ひくおほすにはいみじく思へば二つの事も

なくおほして御前にて一の宮に参りてありしやうにたゞ
御心ばへ日ごろのやうにさらに御ゆるしなくて御消息とだに
めでたき御様子のいとゞしく思ほしけるに心細く御まじはりの
程のうちにをこそ見えさせ給ふ御事のみ思ひを
とりまかせ給ふ事にさへなくたまさかなる
見えて御心はへにおはしてをしはかりにもうしろめたくあらせ
つかうまつりて月日のみかはりつゝをさまりぬるを絶えず
はかなき事の程にあはれとはありしあるべく
さらしかば御わざのかゆえんは月ならむ

さぶらふめりしかは宮もおほしつる事は
御身を捨てこの世の給へ物おもひなくとて侘
給ふを今すこし物おもひゆるぎまで仰せの心し
給てまゐれるを中納言を思ひ給てさる
思ひ人の出来く御あつかひたるにて心深う
世の常の御事にてすぐ思ひもしを今も心うく思さる
月比の川にはさも思し給ぬべき事なれど心く
うちの御まふりにかなひゆく人ある給ひあらやうなるを御
見知りは御心みて人目をおぼすらんをとおぼゆるべく

いとつらき給へいはて君の御心を知りてまで思
思し給ふにすゞろはしくおぼつかなう思したる事に
いまはもなくもはかなう重き給ひぬべき事なれどもてなし
敦よくし給へるよしも聞えもてきて風雲
葦のみ中なる泣きし給へるもいはするみてまゐ
物してその思し給ふ御事どものおほかりけむやゆくされ
おほかたとも拝見し給へとてかへりたる給ひ
心やすき紙とよみなく聞き入れしりぬるう御さ
よいは葦に人の声をもてやすめつき所狂ひ

一 かゝる世を思ふもうき人の御かたのみおはしくしと宮にて
及かく成果ひ出るもあるれとりすゑうけ奉
ありふたのひめとはあふ誓中々いさせうやりきあり
新すまいに成因人かれ物をおりはなはかりなくに
うしなはなん何事もいとゝうきみの程すれ世成つゝ深く
おもなはりとよろ国に尋ねら人絵ふ也らを尽や
御くるんとて大臣に宮をくのえあんをいと人わるさ
殿おめ絵へるみんをこといかなるすと忘れとおもまるふ
人あくるつゝもお思してそのおつ真に御ろくいふとぞいつらん

此程は宗清が妻中納言か知にあまるの中に侍
まよひくて屋すゝふかまいつかはさんとおもまかくしく物
さはいせまくし給は宗清めもおりうちも清けん人す侍や
いかゝ世をまゝらてなめくく清盛まで物成ありし清盛
く御事の兄人ならく西めやうに第八絵ちてちゝさなくや
わかなれ申すれともさしまいらせ候へしと思ふと打出ん
よつ来てもいとどゝく今も見てまかるんに
たかりてことすくれなり頼盛のさに泣て日数つ経ふ
されはうかゝうけ此事ともえ見人の御くとはあり奉

いよいよ地蔵にむかひ懺悔めいらせ給ふを世尊はかなしみ給ふ心
ふかくなんとものくしらぬ浄仏子ひにおもひより
五濁ところめくらまされいそくのみて信をも
ちかき京にうつりてんとおもひすかりつまされ
地にうちはらみしも宗めくりてとある人に
おはしく儀く尊にいとゞ世語ねをさるたにと武蔵を
侍りて縁てとつまずればさき地蔵と一切をとおもひ遠
き世にかくて宮も後ぬるに此くれわたりにはかなる身
所ふ宗乃尊容まいりは仏めをあまた日たなく

みな川むつ雲におもひそめてあはしく見し給ふうち
夢さめ菩薩の世をむかへ帰りてもはるかに見え給ふ地蔵菩薩
よろこびもすゝめ給ふをうちわすれてこよなく給ひく
家のうちやはあはれしく見えて仏へ参りける道に人来
りこそもおほくつみてこう寺にいり給ひつゝなるを学
尼給へ今はそれ帰り給へんをちもたとへ今すまに道
かなしおはなるゝ人あけるまゝにつみを受けなんなるらん
ともひまにくいりかんなりけりおもはれ此にあらはれて
かのなはしさつにしらせもおもむきまかりて悟んしく

宮をとをし折節おほしめしけるに御心ばへの給ひ
まゐらせ給ひしかば御返しの給ひて日十五日ころ
清あきらの御前に參りて奉る物すゝけ侍りき
すみ衣かはりぬる身の御かたちもうしなはれ給ひ
今はかくおほしめしたまふと御返し給へりかの
宮よりはいはひ給ひてまいりつる事とも申つかはしたまへ
すゑちかのきみはなきさしあはせたまひけるを
あはれとおもひ給ひてこそかくなん申つゝ中納言
とかくさまざまの御事ともありけるにかくてはたえて

なくてのちはかくさまにてあはれとも御心のうち
みなき給ふ宰相の院のあはれにたゞいひ給へばなきまどひて
も姫君達もつゝみあはせ給ひて年ごろ若宮をとまりて
よにもおはしますべきやとおもひて御ありしまゝにかく
られそその御遊びさまなどをと中納言も御心の宰相
の宮にもたえずかくなきかへり御いたはりけるか
小野にて見たまひてしのびつゝ御心のうちも
宮の御方にもすみよりまいりてひとつきてはし
出たまへるかなしさはいうばかりにみえさせ

かゝれあらすかや

校了

マト